

## 2022年度 事業報告書

3年にも及んだコロナ禍もようやく収束に向かいつつあり、昨秋以降の行動制限の緩和を背景に、社会・経済活動の正常化を見据えた動きが進んでいます。

2022年度、当財団はこのコロナ禍で失われた青少年の健全な成長に必要なスポーツや体験学習の機会、国民の心身の健康悪化など、社会的課題の解決に取り組みました。新たに「バスケットボール U18 リーグ戦」の後援、「JAPAN TRAIL®構想」の公表など、夢のある事業がスタートしました。

財団創設者 安藤百福の「食とスポーツは健康を支える両輪である」という理念を実現すべく、子どもたちの健全な心身の育成と食文化の発展に貢献する公益事業を実施しましたので、以下のとおりご報告いたします。

### <公益目的事業>

- (1) 公1. スポーツ支援事業
- (2) 公2. 自然体験活動支援事業
- (3) 公3. 食文化振興事業
- (4) 公4. 発明記念館運営事業

### <収益事業等>

- (1) 収1. 施設賃貸および物販等の業務受託

### <公益目的事業>

#### ■公1. スポーツ支援事業

「食とスポーツは健康を支える両輪である」という基本理念のもと、陸上競技やテニス、バスケットボールなど、スポーツを幅広く支援しています。スポーツを通じて、子どもたちの夢を応援し、青少年の健全な心身の育成を図ります。

#### 1. 「第38回全国小学生陸上競技交流大会」の事業後援

「未来ある子どもたちにあらゆるスポーツの基本である正しい走法を学ばせたい」という公益財団法人日本陸上競技連盟の考えに賛同し、走る楽しさ、仲間とふれあう喜びを広めることを目的に、1985年から全国の小学生を対象とする小学生陸上競技大会を支援しています。

2022年度は、コロナ禍で開催が危ぶまれた地域があったものの、全ての都道府県において地方大会が開催され、約34,000人の選手や関係者が参加し、大いに盛り上がりました。

8月の横浜・日産スタジアムでの決勝大会でも、感染対策を徹底することで、全国47都道府県の選手が集い、仲間たちと交流を深めることができました。

また、コロナ禍で様々な機会が失われる状況が続いたため、より子供たちの記憶に残る大会運営を行いました。表彰式では、本大会の出場経験者で、東京2020オリンピック競技大会に出場された山縣亮太選手や寺田明日香選手など、憧れのオリンピックがプレゼンターを務めました。

更に、「記録」に対する興味、喜び、自信、目標を感じてほしい、本大会への出場を思い出に刻み、活動のモチベーションや将来への希望を持ってほしいという願いから、「My record」を実施しました。これは、地方大会に出場した全小学生の記録を日本陸上競技連盟のウェブサイトに掲載するものです。なお、順位付けや競争による小学生期の過度なトレーニングや精神的負担の増

長を防ぐため、相対的な順位表にはなりますが「ランキング」とはせず、「My record」としていただきます。

- 【地方大会】 開催日程：2022年6月～7月 参加者数：約34,000人  
【全国大会】 開催日程：2022年8月19日(土)～20日(日) 参加者数：620人  
【事業費】 125,246,279円

## 2. 少年少女陸上競技指導者表彰「安藤百福記念章」表彰

子どもたちの健全な心身の育成には、優れた指導者の存在が不可欠であるとの考えから、小学生の指導者を顕彰する少年少女陸上競技指導者表彰「安藤百福記念章」を、各都道府県から選出された指導者47名に贈呈し、今後の一層の活躍を期待して表彰しました。

## 3. 「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」支援事業

当財団と公益財団法人日本陸上競技連盟は、若手アスリートの海外挑戦、武者修行を支援する「安藤財団グローバルチャレンジプロジェクト」を2015年9月にスタートしました。世界のトップ選手が集うトレーニング環境に飛び込み、現地のコーチに指導を乞い、切磋琢磨しながら、トップアスリートとして求められる資質を育成するもので、国際大会におけるメダリスト誕生をサポートするものです。これまで、延べ57名の若手アスリートを支援しました。

2019年、2020年に本プロジェクトを活用して、チェコで単独武者修行した北口榛花選手が、2022年7月に開催された世界陸上競技選手権オレゴン大会において、陸上女子フィールド種目における日本人初のメダル獲得をはじめ、2022年度支援者の三浦龍司選手が世界最高峰のダイヤモンドリーグのファイナルに進出するなど大きな成果を上げています。

【2022年度支援対象者】 8名

氏名	年齢	種目	2022年度 活動期間	日数	活動拠点
三浦 龍司 (順天堂大学)	20 男	3,000m 障害	6月26日～7月2日 8月22日～9月10日	27	ダイヤモンドリーグ 転戦 (スイス他)
アツオビンジェイソン (福岡大学)	20 男	砲丸投	8月2日～8月17日	16	ドイツ国内転戦 (ベルリン・ハレ他)
飯澤 千翔 (東海大学)	21 男	1,500m	1月5日～3月8日	63	アメリカ (アリゾナ)
村竹 ラシッド (順天堂大学)	20 男	110mH	2月19日～3月13日	23	オーストラリア (ゴールドコースト他)
宇野 勝翔 (順天堂大学)	21 男	100m	2月19日～3月13日	23	オーストラリア (ゴールドコースト他)
本郷 汰樹 (名古屋大学大学院)	23 男	100m	3月2日～3月26日	25	オーストラリア ニュージーランド
吉村 玲美 (大東文化大学)	22 女	3,000m 障害	2月7日～2月25日	19	オーストラリア (アデレード他)
道下 美槻 (立教大学)	21 女	1,500m	2月20日～3月18日	28	オーストラリア ニュージーランド

【事業費】 14,634,526円

## 4. スポーツ全般におけるジュニアアスリート育成の後援事業

本事業は、青少年の健全な心身の育成を図るという目的のもと、公益財団法人日本オリンピック委員会に加盟する競技団体を対象とし、全国的な組織またはそれに準ずる団体の活動を通じて、

ジュニアアスリート育成を支援します。

#### <2022 年度後援事業>

##### (1) 公益財団法人日本テニス協会主催 男子ジュニア育成プログラム

2013 年からスタートした本育成プログラムでは、コロナ禍により、特に海外遠征が縮小したものの、コーチによる巡回指導や国内合宿などを支援しました。

【参加者数】	・海外遠征・合宿（ワールドジュニアアジア予選 他）	選手・指導者 15 名
	・修造チャレンジキャンプ（年 3 回開催）	選手・指導者 72 名
	・国内強化合宿（年 5 回開催）	選手・指導者 31 名

【事業費】 16,600,763 円

##### (2) 公益財団法人日本バスケットボール協会主催 U18 リーグ戦

U18 世代バスケットボール界では、高校での部活動、クラブチームでの活動に区別されており、相互に交流がないことが育成、普及面での課題となっています。また、部活動の大会はトーナメント形式が多く、試合機会や対戦相手の分析力（スカウティング）を養う機会や高いレベルの試合数の不足も指摘されています。

本リーグは、部活・クラブなどの垣根を超えたリーグ戦文化の定着と若年層の育成強化、裾野の開拓を目的に、2022 年度新たに創設したもので、高校生世代のチャレンジ精神を沸き立たせ、日本のバスケットボール界の底上げを図るものです。

2022 年度は、実力が拮抗する男女 8 校によるトップリーグと、関東、東海、中国、四国の 4 地域のブロックリーグを支援しました。将来的には B リーグユースチームの参加、「トップ」「ブロック」に続き「都道府県」リーグを設置など、リーグを活性化させ、競技レベルの強化、底上げにも貢献してまいります。

#### 【参加者数】

区分	リーグ数	チーム数	試合数	選手チームスタッフ	審判・競技運営スタッフ	合計人数	試合数	参加者数
トップ	1	16	56	320 名	700 名	1,020 名	264	4,690 名
ブロック	4	58	208	1,160 名	2,510 名	3,670 名		

\*ブロックリーグ開催地域：関東、東海、中国、四国

【事業費】 180,400,000 円

## ■公 2. 自然体験活動支援事業

「自然とのふれあいが子どもたちの創造力を豊かにする」という安藤百福の考えのもと、財団設立以来、青少年の健全な心身の育成を目的に、子どもたちの「協調性」や「自活力」を育む自然体験活動の更なる普及と活性化に取り組んできました。

### 1. 「第 21 回トム・ソーヤースクール企画コンテスト」の実施

子どもたちの創造力やチャレンジ精神を育む、独創性に富んだ自然体験活動を募集し、優れた企画の実施を支援、表彰する「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」は、2002 年にスタートしました。2022 年度は、160 件の応募がありました。コロナ禍で活動が難しい状況の中、ユニークで創造的なプログラムが数多く、ICT 機器を有効活用し自然への理解と教育効果を高める活動や、熱心な教員や指導者による達成感を感じられる自然体験活動が特長として挙げられます。その中

から 50 団体を選考し、実施支援金を贈呈しました。活動に参加した子どもの数は 16,000 人にのぼります。

さらに、その活動報告書を審査した結果、学校部門では SDGs や生物多様性について学習しながら自然体験基地をデザインし、造成することを通じて、子どもたちの主体性や創造性を引き出した大阪市立瓜破西小学校（大阪府）の「瓜西里山 BASE プロジェクト～学校にワクワクと癒しを！～」に文部科学大臣賞はじめ、14 団体を表彰しました。

1 月 28 日、安藤百福発明記念館 横浜において 3 年ぶりに有観客での表彰式を開催し、表彰団体より活動報告を発表いただくとともに、元民放解説委員長、海洋冒険家の辛坊 治郎氏をお招きし、「太平洋往復横断へのチャレンジ ～今、子どもたちに伝えたいこと～」と題した講演会も行いました。

また、表彰団体の活動報告をホームページ「自然体験.com」において広く公開しました。

【後援】文部科学省、横浜市、横浜市教育委員会

【表彰団体】

[学校部門]

◆ 文部科学大臣賞（副賞：100 万円）

団体名：大阪市立瓜破西小学校（大阪府）

企画名：瓜西里山 BASE プロジェクト ～学校にワクワクと癒しを！～

◆ 優秀賞（副賞：50 万円）

団体名：横浜市立いずみ野小学校（神奈川県）

企画名：いずみ野小地産地消プロジェクト

[一般部門]

◆ 安藤百福賞（副賞：100 万円）

団体名：観音崎自然博物館（神奈川県）

企画名：ジュニア生物調査隊（小学部・中学部）

◆ 優秀賞（副賞：50 万円）

団体名：山村留学人づくりの里運営協議会（富山県）

企画名：源流の山里の暮らしから森と水と人の繋がりを学ぶ

[学校部門・一般部門共通]

◆ 推奨モデル特別賞（副賞：各 30 万円）

プランニングや指導の方法、計画を実施に移す過程などが、多くの学校や団体の参考モデルになると認められた企画に贈呈しました。

① 団体名：浜松市立豊西小学校（静岡県）

企画名：ふるさと大好き! のびのび「豊西っ子」を育てる

～「豊西ふるさと学習」推進プロジェクトがスタート～

② 団体名：大津市立和邇小学校（滋賀県）

企画名：和邇探検「和邇川の生き物調査と図鑑づくり」

③ 団体名：一般社団法人かのあ（北海道）

企画名：かのあアウトドアクラブ

④ 団体名：広島干潟生物研究会（広島県）

企画名：広島デルタの干潟に出かけ、生き物たちを見て、触って、研究しよう

◆ トム・ソーヤー奨励賞（副賞：各 20 万円）

企画内容がユニークで他団体への刺激や参考となり、更なる飛躍が期待できる企画に贈呈しました。

① 団体名：札幌市立澄川南小学校（北海道）

（協働：NPO 法人 北海道森林ボランティア協会）

企画名：すみなみ SDGs ～澄川の森で SDGs を体感！実践！～

② 団体名：NPO 法人 森と海の学校（山口県）

企画名：命をまもる「子ども匠の学校」

◆ 努力賞（副賞：各 10 万円）

[学校部門]

① 団体名：養老町立笠郷小学校（岐阜県）

企画名：「Think Global Act Local」～目指せ地域のトム・ソーヤー～

② 団体名：長浜市立田根小学校（滋賀県）

企画名：「We Love “田ね！” II」～緑豊かな歴史の里 田根学区を舞台に～

[一般部門]

① 団体名：NPO 法人 河北潟湖沼研究所（石川県）

企画名：河北潟流域まるごと体験 ～流域の自然を守る人材育成カリキュラム～

② 団体名：山陰海岸国立公園鳥取砂丘ビジターセンター（鳥取県）

企画名：ちびっ子砂丘探検隊 2022

【表彰式】 2023 年 1 月 28 日(土) 安藤百福発明記念館 横浜

講演会：辛坊 治郎氏（元民放解説委員長、海洋冒険家）

太平洋往復横断へのチャレンジ ～今、子どもたちに伝えたいこと～

【事業費】 20,511,385 円

## 2. 安藤百福センター事業

コロナ禍による密の回避につながる、自然の中での活動への志向が高まっています。自然の中を歩くことは、体力、好奇心を育み、環境学習にもつながる青少年教育の有効なツールです。

2022 年 6 月、特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会は、ロングトレイルの普及のため、日本列島を南から北まで一本道でつなぐ全長約 1 万キロの山旅「JAPAN TRAIL®～Hiking Nippon～」を提唱。「そこに立てば日本が見えてくる」をテーマに、この国の豊かな自然と歴史・文化を再発見できる、新しい歩く旅の道を記者発表しました。この取り組みを通して、①心身の健康と自然環境の保護意識の向上、②子どもたちの好奇心を育む自然体験活動の機会の提供、③地域観光への再興が期待されるインバウンド需要の対応、④SDGs への関心を高めることなどを図ります。

当財団は、「JAPAN TRAIL®～Hiking Nippon～」提唱を支援しています。このような背景から、安藤百福センターの事業は、「自然体験の基本は歩くこと」と位置づけ、ロングトレイル普及につながる講座などの事業を展開しました。

また、2023 年 4 月、長野県小諸市の安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センターを、海外にも通じる「安藤百福記念 アウトドア アクティビティセンター」に名称変更し、コロナ禍で高まりをみせたアウトドア活動の普及・振興に一層取り組みます。

## (1) 自然体験活動振興事業

### ① 人材育成のための研修会、講座、シンポジウム等の開催

公益社団法人日本山岳ガイド協会主催の危急時対応技術講習会などの安全管理に関する研修会や日本山岳会主催の登山教室指導者養成講習会をはじめ、大学や民間のアウトドア活動団体が安藤百福センターを利用して、各種研修会を実施

利用団体数：51 団体（1,029 名、のべ 1,806 名）

### ② 自然体験活動への興味を喚起し、自然体験活動を活性化する施策の実施

コロナ禍の影響を受けながらも、自然を楽しむ講座や体験、安藤百福センターの野外研修フィールドである浅間・八ヶ岳パノラマトレイルにおいて、次の講座などを主催

- ・大人のトレイル歩き旅講座（全 6 回予定：内 4 回開催）
- ・みんなでダイヤモンド浅間、パール浅間を見に行こう（全 3 回予定：内 1 回開催）
- ・子どもクライミング教室（全 8 回予定：内 7 回開催）
- ・ロングトレイルハイカー入門講座（全 6 回予定：実開催 4 回、オンライン開催 2 回）
- ・＜オンライン講座＞トレイル歩きのカラダづくり講座（1 回）

## (2) ロングトレイルの普及と安全対策事業への支援

子どもたちの自然体験の主な活動場所は、山、川、海や身近な森林、キャンプ場が中心であり、どのフィールドでも「歩く」ことが基本となります。「アウトドアで歩く文化」の醸成を図り、子どもたちが安心して自然体験が楽しめるよう安全対策事業を支援しました。

- ・ロングトレイルの情報収集と発信、広報活動支援、全国の運営団体との交流
- ・第 9 回ロングトレイルシンポジウム（2022 年 4 月 9 日開催、2021 年度振替分）
- ・第 10 回ロングトレイルシンポジウム（2023 年 2 月 25 日開催）の共催

【事業費】 170,011,979 円

## 3. 自然体験活動支援ホームページ「自然体験.com」の運営

自然体験活動に関する情報や専門家によるノウハウを満載しているホームページ「自然体験.com」は、学校完全週 5 日制が施行された 2002 年にスタートしました。当財団では、「自然体験.com」を通じて、保護者や指導に携わる方々へ自然体験活動に関する情報を提供し、子どもたちの「創造力」や「自活力」を育む自然体験活動の輪を広げる事業を行なっています。

また、「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」の募集や、支援団体の活動状況を伝える速報レポート、活動報告書も掲載しています。文部科学大臣賞、安藤百福賞など受賞した団体の活動報告の動画を公開し、他団体の参考としています。

【URL】 <http://www.shizen-taikken.com>

【事業費】 7,486,667 円

## ■公 3. 食文化振興事業

### 1. 食創会「第 27 回安藤百福賞」表彰事業

食創会は、1996 年、「食創為世（食を創り世のためにつくす）」という安藤百福の理念に基づき、新しい食の創造を推し進め、食品産業の発展に貢献することを目的に創設されました。当財団では、「食創会」を主宰し、「安藤百福賞」の表彰を行っています。

「安藤百福賞」は、安藤百福がインスタントラーメンを発明し新しい食文化を創造したように、

食科学の振興ならびに新しい食品の開発に貢献する研究者、開発者およびベンチャー起業家を表彰するものです。大賞や優秀賞のほか、発明発見奨励賞は、大学などに所属する若手研究者や中小企業の開発者を表彰対象としています。2016年度より、小泉純一郎元内閣総理大臣を食創会会長に迎え、食文化の向上に貢献する事業の更なる活性化を図っています。

今年度は、4年ぶりに有観客での表彰式をホテルニューオータニ東京で開催しました。

大賞は、慶應義塾大学 先端生命科学研究所 所長の富田勝氏で、研究所がある「鶴岡サイエンスパーク」をシステムバイオロジーの世界的拠点へと発展させ、基礎研究の発展のみならず、人材育成、先端的研究とその産業化による地域振興にも貢献したことが評価されての受賞となりました。

【後 援】 文部科学省、農林水産省

【表 彰 者】

● 大賞（副賞：1,000万円）

富田 勝 氏（慶應義塾大学 先端生命科学研究所 所長、環境情報学部 教授）  
「システムバイオロジーの先駆研究と食品産業への貢献」

● 優秀賞（副賞：各200万円）

・高久 洋暁 氏（新潟薬科大学 応用生命科学部 学部長、教授）

「油脂自給率向上を目指した微生物による地域バイオマスからの日本型油脂発酵生産システムの開発」

・山本 雅之 氏（東北大学大学院 医学系研究科 教授）

「植物栄養素ファイトケミカルによる抗酸化生体防御作用の分子メカニズム解明」

● 発明発見奨励賞（副賞：各100万円）

・小栗 靖生 氏（京都大学大学院 農学研究科 助教）

「ベージュ脂肪前駆細胞を標識する新規分子マーカーの発見と革新的な機能性食品開発への応用」

・田中 充 氏（九州大学大学院 農学研究院 准教授）

「食品成分の高度可視化技術の開発と食機能・品質評価への応用」

・三島 英換 氏（東北大学大学院 医学系研究科 非常勤講師、ヘルムホルツセンター  
ミュンヘン 客員研究員）

「食品成分ビタミンKの新たな作用としてのフェロトシス抑制作用の発見」

・八木 健一郎 氏（有限会社三陸とれたて市場 代表取締役）

「高品質の冷凍刺身『盛るだけお造り・天然旬凍』開発による三陸地域の活性化」

【表 彰 式】 2023年3月7日(火) ホテルニューオータニ東京

【事 業 費】 46,603,846円

## 2. 食科学の進展に寄与する学生への「安藤百福 Scholarship」奨学支援事業

日本国内では、経済的理由で就学が困難な学生を支援するため、さまざまな奨学金制度がありますが、大学院生に特化した奨学金制度は十分ではなく、アルバイトなどで学費や生活費を工面している学生が少なくありません。今般のコロナ禍において、この問題は深刻化しています。

大学院は、研究者や高度な専門家を養成することから、日本の将来を担う優秀な人材が、経済的な理由で大学院への進学を断念する、あるいは大学院の休学または退学を余儀なくされると、新たなイノベーションを創出する人材を失うことにもなりかねません。

当財団は、食科学のイノベーションをコロナ禍で停滞させてはならないとの思いから、「安藤百

福 Scholarship」奨学支援事業を創設し、2022年度、食科学の進展に寄与する大学院生100名に年額100万円の奨学金を給付しました。安藤百福の掲げた「食創為世」の理念のもと、このコロナ禍にあっても、食文化の向上、振興を担う将来の人材の育成を図ります。

【事業費】 99,840,000円

### 3. 「食分野における主観的ウェルビーイング指標開発」調査研究事業

WHOは、「健康とは、身体的・精神的・社会的にウェルビーイングな状態」と定義しています。ウェルビーイングは、客観的な側面と主観的な側面に分かれており、特に食分野における「主観的ウェルビーイング<満足度・幸福度>」について基礎となるデータの蓄積が乏しく、革新のための知見が足りない状況です。

当財団は、2021年11月、公益財団法人Well-being for Planet Earthと連携し、食文化の向上に資する研究や開発につながる「食分野における主観的ウェルビーイング指標開発」調査研究事業を創設しました。調査収集したデータを広く公開することにより、研究者、開発者、起業家の研究、開発を促進し、食文化や関連政策の向上、人々の健康改善、幸福の享受に貢献してまいります。

2022年度は、「食の主観的体験」、「食の主観的評価」および「食の選択肢と自己決定」について、当財団が設問を策定し、Gallup社（米国）に調査を委託しました。世界最大の世論調査“Gallup World Poll”において、15歳以上を対象に1ヶ国あたり約1,000人、世界人口の99%を代表する約150ヶ国で調査を進めてました。収集したデータを分析し、2023年秋頃に公表する予定です。

## ■公4. 発明記念館運営事業

「人間にとって一番大事なのは創造力であり、発明・発見こそが歴史を動かす」という安藤百福の考えに基づき、世界の食文化を変えたインスタントラーメンの誕生から、産業として世界に発展していった歴史を通じて、未来を担う子どもたちに発明・発見の大切さを伝え、「ベンチャーマインド」や「クリエイティブシンキング＝創造的思考」を育み、青少年の健全な心身の育成に寄与することが、この事業の目的です。

2022年度は、昨秋以降の行動制限の緩和を受け、当財団では安心・安全を確保しながら、体験学習の機会創出のため学校教育での利用促進や、来館定員枠の拡大等を行いました。両記念館において賑わいを取り戻しつつありますが、2022年度来館者数は、池田記念館43.6万人（前年比346%、2018年度比48%）、横浜記念館70.3万人（前年度比227%、2018年度比63%）、両館あわせて114万人とコロナ禍前の6割程度の回復となりました。

学校教育や海外インバウンドの更なる利用拡大を図り、発明・発見の大切さを伝え、発明心の涵養を促進いたします。

### 1. 安藤百福発明記念館 大阪池田（池田記念館）

1999年11月、世界初のインスタントラーメン発祥の地・大阪府池田市に開館した池田記念館では、2022年度来館者数は436,000人、累計来館者が1,061万人を突破しました。

【施設概要】 所在地：大阪府池田市満寿美町8番25号

敷地面積：4,477㎡、延床面積：3,423㎡

【開館年月】 1999年11月 累計来館者数 10,611,000人



<2022 年度実績>

【開館日数】 307 日

【来館者数】 436,000 人（前年度比 346%、2018 年度対比 48%）

【体験者数】 チキンラーメンファクトリー 21,600 人（2022 年 10 月より再開）  
マイカップヌードルファクトリー 387,000 食

【学校教育】 742 校 34,100 人

【事業費】 163,926,175 円

## 2. 安藤百福発明記念館 横浜（横浜記念館）

2011 年 9 月、安藤百福の思いを世界に発信しようと、国際都市・横浜みなとみらいに開館した横浜記念館は、2023 年 1 月 30 日、来館者 1,000 万人を達成しました。

2022 年 7 月、宇宙飛行士 野口 聡一氏に、安藤百福発明記念館名誉館長にご就任いただきました。夏休みには子ども向けセミナーを開催し、安藤百福が開発した宇宙ラーメン「Space Ram」のエピソードなどをご紹介いただきました。

【施設概要】 所在地：横浜市中区新港 2 丁目 3 番 4 号

敷地面積：4,000 m<sup>2</sup>、延床面積：9,883 m<sup>2</sup>

【開館年月】 2011 年 9 月 累計来館者数 10,120,000 人

<2022 年度実績>

【開館日数】 307 日

【来館者数】 703,000 人（前年度比 227%、2018 年度比 63%）

【体験者数】 チキンラーメンファクトリー 22,300 名（2022 年 10 月から再開）  
マイカップヌードルファクトリー 526,000 食  
カップヌードルパーク 休止  
ワールド麺ロード 123,000 食

【学校教育】 897 校 49,900 人

【事業費】 546,560,518 円

<収益事業等>

### ■施設賃貸および物販の業務受託

当財団が所有する発明記念館（池田記念館、横浜記念館）の一部を、物販コーナーとして賃貸しました。なお、これまで、池田記念館では物販業務を受託していましたが、業務の見直しに伴い、2018 年 10 月より業務受託を一時休止しています。

【賃貸面積】 ① 池田記念館 324 m<sup>2</sup>（館全体の延床面積に占める割合：約 9%）

② 横浜記念館 115 m<sup>2</sup>（館全体の延床面積に占める割合：約 1%）

【事業費】 10,873,249 円

以上